

# 横須賀市自然・人文博物館付属天神島臨海自然教育園内の鳥類相

村石健一\*

The bird fauna of the Tenjin-jima Marine Biological Garden, Yokosuka City,  
Kanagawa Pref.

MURAISHI Kenichi\*

キーワード：鳥綱、鳥類相、天神島、横須賀市、三浦半島

Key words : Aves, bird compositions, Tenjin-jima, Yokosuka City, Miura Peninsula

2009年4月から2012年3月までの3年間、横須賀市自然・人文博物館付属天神島臨海自然教育園で鳥類の調査を行い、10目31科94種が確認された。記録された種を季節的出現状況と環境利用状況から考察した。1999年6月から2002年3月の鳥類調査と比較したところ、67種が共通していることがわかった。特筆すべきは、カワウがほぼ通年で観察されたことである。天神島周辺で初めて確認された2000年頃と、全国的にカワウの分布が広まった時期とはほぼ一致しており、その頃から天神島に定着したと推察された。

Bird compositions have been surveyed in the Tenjin-jima Marine Biological Garden from April 2009 through March 2012. A total of 94 species, 31 families and 10 orders were recorded in three years. Seasonal species changes and habitat utilizations were analyzed. In addition the results were compared with those of previous bird surveys conducted from June 1999 through March 2002. The compared results showed that 67 species were recorded in both previous and present surveys. It was notable that a number of Great Cormorant (*Phalacrocorax capillatus*) began to be commonly seen in the area through the year. The first record of Great Cormorant in the Tenjin-jima was about 2000, and it was almost the same period when the species expanded their distributions all over Japan. It is assumed they have settled in this area since then.

## はじめに

天神島臨海自然教育園（以下教育園と略す）は、神奈川県横須賀市佐島にあり相模湾に面している。1965年に天神島・笠島を含む周辺海域が神奈川県の名勝天然記念物に指定され、1966年から横須賀市自然・人文博物館の付属施設として博物館が管理運営している。海

浜植物を保護し、動植物を採集して持ち出し禁止にするなど人為による影響を最小限に留めて、自然保護に努めているため、三浦半島のほかの海岸地域に比べ、自然の状態がよく保たれている。周囲1kmあまりの島ではあるが、中心部に照葉樹林が存在し、林縁の低木層、草地へと植生がつながっている。また海岸には砂浜と岩礁が広がり、笠島を含めて変化に富んだ多様な環境が存在し

\* 〒253-0021 神奈川県茅ヶ崎市浜竹4-2-18  
原稿受付 2013年9月28日 横須賀市博物館業績 第675号

ている。教育園は、数多くの海浜植物や海岸動物を見ることができる貴重な場所となっており、体験学習の場としても多くの人々に利用されている。

教育園の鳥類は、これまで柴田（1974）、橋口（2003）によって調査され、橋口（2003）では、28科79種の鳥類を報告している。ここでは10年を経過した教育園の鳥類相を明らかにするために本調査を行った。また橋口（2003）の結果と比較し、その変化を考察することも目的とした。本報をまとめるにあたり、横須賀市自然・人文博物館の稻森但氏と萩原清司氏ならびに日本大学生物資源科学部博物館の田中雅宏氏には教育園の鳥類について貴重な情報とアドバイスをいただいた。また天神島臨海自然教育園ならびに天神島ビジターセンターの職員の方々には現地調査でご協力をいただいた。この場に記して厚くお礼申し上げる。

### 調査方法

調査期間は2009年4月から2013年3月で、4年間の調査回数は延べ151回（2009年度：49回、2010年度：52回、2011年度：50回）であった。1週間に1度、9:00～11:00に島の周囲を時速約2kmで踏査し、目視と鳴き声で種を確認して記録した。調査には10倍の双眼鏡と30倍の望遠鏡を使用し、調査範囲は天然記念物に指定された保護海域内とした。

### 結果

調査期間中に10目31科94種の鳥類を確認し、各種について出現時期を示した（第1表）。確認回数／調査回数を出現率とした。出現率90%以上の高い頻度で観察された鳥類は、カワウ*Phalacrocorax capillatus*、アオサギ*Ardea cinerea*、トビ*Milvus migrans*、ウミネコ*Larus crassirostris*、キジバト*Streptopelia orientalis*、ハクセキレイ*Motacilla alba*、シジュウカラ*Parus minor*、メジロ*Zosterops japonicus*、ムクドリ*Spodiopsar cineraceus*、ハシブトガラス*Corvus corone*の11種であった。このうちトビについては全ての調査で記録された。これに次いで高い出現率（50%～85%）であった種は、イソシギ*Actitis hypoleucos*、スズメ*Passer montanus*、イソヒヨドリ*Monticola solitarius*、コサギ*Egretta garzetta*、クロサギ*Egretta sacra*、ハシボソガラス*Corvus macrorhynchos*、コゲラ*Dendrocopos kizuki*、カワラヒワ*Carduelis sinica*の8種であった。毎年通年で確認された上記19種は、

教育園では留鳥とみなされる。

季節別では4～9月の間でツバメ*Hirundo rustica*とカルガモ*Anas zonorhyncha*が毎年確認された。カルガモは三浦半島では通年で見られる種だが（林・鈴木、1991），教育園では4～6月の繁殖期に出現率が高くなることからこの2種を夏鳥とした。

5月と9月の渡りの時期にはキヨウジョシギ*Arenaria interpres*、キアシシギ*Heteroscelus brevipes*、チュウシャクシギ*Numenius phaeopus*が毎年観察された。キヨウジョシギでは冬期（2012年1月）にも確認があった。またオオミズナギドリ*Calonectris leucomelas*も渡りの時期に大きな群れが観察されたことから、以上の4種を旅鳥とした。

10～3月に毎年観察された鳥類で高い出現率（冬期に50%以上）を示した種は、ウミウ*Phalacrocorax capillatus*、ミサゴ*Pandion haliaetus*、セグロカモメ*Larus argentatus*、オオセグロカモメ*Larus schistisagus*、ツグミ*Turdus naumanni*、タヒバリ*Anthus rubescens*、アオジ*Emberiza spodocephala*、ダイサギ*Ardea alba*、ゴイサギ*Nycticorax nycticorax*、カワセミ*Alcedo atthis*、ヒヨドリ*Hypsipetes amaurotis*、モズ*Lanius bucephalus*、ウグイス*Locustella pyri*であった。このほかに前記13種と比べて出現率は低い（25%～30%）が、ユリカモメ*Larus ridibundus*、シロハラ*Turdus pallidus*、アカハラ*Turdus chrysolaus*、シメ*Coccothraustes coccothraustes*の4種も毎年観察された。この中でダイサギ、ゴイサギ、カワセミ、ヒヨドリ、モズ、ウグイスは三浦半島では留鳥とされている（林・鈴木、1991）が、教育園では冬期のみ確認されたことから上記の17種を冬鳥とした。

このほかの種で出現率が10%に満たない52種類を通過鳥として区分した。このうちコチドリ、イワツバメ、センダイムシクイは三浦半島では夏鳥に、ヒメウ、ノスリ、マガモなどのカモ類は冬鳥とされている（横須賀市自然博物館、1991）。以上の調査結果から教育園で観察された鳥類は留鳥19種、夏鳥2種、冬鳥17種、旅鳥4種、通過鳥52種となった。

以上のように記録された鳥類がどのような環境に出現したかをまとめた（第2表）。最も多くの種が出現したのは岩礁地帯で、全体の半数以上の49種（52.1%）を占めた。次いで出現種数が多かった環境は樹林で40種（42.5%）が観察され、草地は24種（25.5%）、海域22種（23.4%）、砂浜20種（21.2%）であった。教育園の環境の全てで出現したのはトビで、海上を通過するだけでなく、海面で魚を拾い上げる姿がたびたび観

第1-1表 教育園内における鳥類94種の月別出現頻度(1).

種	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	出現回数
トビ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	151
アオサギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	149
カワウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	147
ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	146
ウミネコ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	145
シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	144
ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	142
ムクドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	141
メジロ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	140
キジバト	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	139
スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	129
イソシギ	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	126
コサギ	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	107
ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	104
クロサギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	104
オオセグロカモメ	○	○		△	○	○	○	○	○	○	○	○	93
イソヒヨドリ	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	93
コゲラ	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	87
ヒヨドリ	○	△					○	○	○	○	○	○	81
カワラヒワ	○	○	○	○	△		△	△	○	○	○	○	80
ツバメ	○	○	○	○	○	○	○					△	77
ダイサギ	○	○	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	71
アオジ	○	△					△	○	○	○	○	○	62
カルガモ	○	○	○	△			△	○	△	△	○	○	55
ウミウ	○	△					○	○	○	○	○	○	55
ツグミ	○						△	○	○	○	○	○	52
ウグイス	△	△				△	○	○	○	○	○	○	49
カワセミ			△		△	○	○	○	○	○	○	△	48
ミサゴ	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○	△	△	47
キアシジギ	○	○	△	△	○	○	○						47
ゴイサギ							△	△	○	○	○	△	45
タヒバリ	△				○		△	○	○	○	○	○	41
セグロカモメ	○						△	○	○	○	○	○	37
モズ			△			△	○	○	○	○	○	△	35
キョウジヨシギ	△	○	△		○	○	○	△					31
ユリカモメ	○	△				○	○	○	○	△			30
チュウシャクシギ	○	○			△	○	△						22
シメ	△	△						△		○	○	○	21
シロハラ	△							○				○	20
オオミズナギドリ	△	△	○	△		△	△						16
ジョウビタキ *1・2								○	○	△	○	△	15
アカハラ								△	○	○	△	△	14
コチドリ *2・3	○	△	△	△	△					○	○	△	10
ウミスズメ			△					△	△			△	9
ドバト *2・3								△	△	○	△	△	8
ウミアイサ								△	△	△	△	△	8
ヒメウ								△	○	△	△	△	7

月内の出現率 (%) ○ 100~75% □ 75~50% △ 50~25% ▲ 25%未満

調査回数  
151回

\*1:2009年度のみ確認種 \*2:2010年度のみ確認種 \*3:2011年度のみ確認種

第1-2表 教育園内における鳥類94種の月別出現頻度(2).

種	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	出現回数
チュウサギ *1*3				△	△	△	△	△	△	△			7
セグロセキレイ *2							△	△	△	△			7
マガモ								△	△	△			6
ホオジロ *2*3							△	△	△	△			5
ハヤブサ *1*3							△	△	△	△			5
ハシボソミズナギドリ *2*3	△	△		△			△	△					5
キセキレイ *1*2								△					5
アオゲラ *1*2	△			△						△			5
コアジサシ *2*3		△											4
クロジ *2*3	△				△						△	△	4
ヒメアマツバメ							△			△	△		4
カンムリカツブリ									△	△			4
キビタキ	△				△	△					△	△	3
セッカ													3
オオタカ *1*2							△			△	△		3
ノスリ										△	△		3
アオバト *1*2					△			△					3
コジュケイ *1*3	△												2
オオヨシキリ *3		△											2
センダイムシクイ *2*3		△											2
イワツバメ *1*2		△											2
ミユビシギ *1*2							△	△					2
アマツバメ *1*2							△	△					2
サシバ *1*2							△	△					2
ホシハジロ *2							△	△					2
ビンズイ *1										△			2
メダイチドリ *1	△												1
ムナグロ *2	△												1
エゾムシクイ *1	△												1
コガラ *1	△												1
イカルチドリ *1		△											1
コオバシギ *1		△											1
トウゾクカモメ *2		△											1
ガビチョウ *3			△										1
オナガ *2				△									1
タカブシギ *3					△								1
トウネン *3						△	△						1
セイタカシギ *1							△						1
ハチクマ *1								△					1
コガモ *2							△	△					1
ヒバリ *1								△	△				1
ハイタカ *2									△				1
ミミカツブリ *2										△			1
チョウウゲンボウ *2											△		1
カモメ *3											△		1
ワシカモメ *1											△		1
シロエリオオハム *3											△		1
94種	45	42	33	29	30	35	46	46	47	46	42	46	調査回数 151回

※1:2009年度のみ確認種 ※2:2010年度のみ確認種 ※3:2011年度のみ確認種

第2表 教育園内の環境別確認種一覧。

環境	確認種
樹林:40種 (林縁を含む)	ゴイサギ, アオサギ, トビ, オオタカ, チョウゲンボウ, イソシギ, キジバト, アオバト, カワセミ, アオゲラ, コゲラ, ハクセキレイ, ビンズイ, ヒヨドリ, モズ, ジョウビタキ, イソヒヨドリ, アカハラ, シロハラ, ツグミ, ウグイス, オオヨシキリ, エゾムシケイ, センダイムシケイ, キビタキ, コガラ, シジュウカラ, メジロ, ホオジロ, アオジ, クロジ, カワラヒワ, シメ, スズメ, ムクドリ, オナガ, ハシボソガラス, ハシブトガラス, ガビチョウ, コジュケイ
草地:24種	カルガモ, イソシギ, キジバト, ツバメ, イワツバメ, キセキレイ, セグロセキレイ, ハクセキレイ, タヒバリ, ヒヨドリ, モズ, ジョウビタキ, イソヒヨドリ, アカハラ, シロハラ, ツグミ, セッカ, アオジ, カワラヒワ, スズメ, ムクドリ, ハシブトガラス, ハシボソガラス, ドバト
砂浜:20種	ダイサギ, コサギ, トビ, コチドリ, キヨウジョシギ, トウネン, ミユビシギ, タカブシギ, キアシシギ, イソシギ, チュウシャクシギ, ハクセキレイ, セグロセキレイ, ツグミ, カワラヒワ, スズメ, ムクドリ, ハシボソガラス, ハシブトガラス, ドバト
岩礁:49種	カワウ, ウミウ, ヒメウ, ダイサギ, チュウサギ, コサギ, クロサギ, アオサギ, カルガモ, トビ, オオタカ, ミサゴ, ハヤブサ, コチドリ, イカルチドリ, メダイチドリ, ムナグロ, キヨウジョシギ, トウネン, コオバシギ, ミユビシギ, キアシシギ, イソシギ, チュウシャクシギ, セイタカシギ, ユリカモメ, セグロカモメ, オオセグロカモメ, ワシカモメ, カモメ, ウミネコ, キジバト, アオバト, カワセミ, ツバメ, イワツバメ, キセキレイ, ハクセキレイ, セグロセキレイ, タヒバリ, ジョウビタキ, イソヒヨドリ, ツグミ, カワラヒワ, スズメ, ムクドリ, ハシボソガラス, ハシブトガラス, ドバト
海上:22種 (探餌の飛翔を含む)	シロエリオオハム, ミミカイツブリ, カンムリカイツブリ, オオミズナギドリ, ハシボソミズナギドリ, カワウ, ウミウ, ヒメウ, ウミアイサ, ウミスズメ, ウミネコ, オオセグロカモメ, マガモ, カルガモ, コガモ, ホシハジロ, ミサゴ, トビ, ユリカモメ, セグロカモメ, ワシカモメ, コアジサシ
上空通過:8種	トウゾクカモメ, ハチクマ, ハイタカ, ノスリ, サシバ, アマツバメ, ヒメアマツバメ, ヒバリ

察された。イソシギ, ツグミ, カワラヒワ, スズメ, ムクドリ, ハシボソガラス, ハシブトガラスの7種は、樹林から砂浜まで陸地環境の全てで出現した。一方で、ひとつの環境だけに出現する種も半数の47種(50.0%)が記録された。コゲラ, メジロ, シジュウカラなどは樹林環境のみを利用し、ウミアイサ, カンムリカイツブリ, オオミズナギドリなどは海上だけに出現した。また教育園の上空を通過するのみの鳥類は、8種(8.5%)が観察された。

## 考 察

### 1. 季節の出現状況からみた鳥類相

教育園の鳥類相の特徴は通過鳥が半分以上の割合を占めていることである。通過鳥の中には、ミミカイツブリやコゲンカンドリといった稀な種も観察されたが、三浦半島では留鳥として普通に見られるヒバリやホオジロといった種が含まれていた。ダイサギ, ゴイサギ, カワセミ, ヒヨドリ, モズ, ウグイスも三浦半島では留鳥だが、教育園では冬鳥として記録された。全体的には、越冬のために渡来する鳥類が多く観察され、三浦半島の鳥類相とほぼ同じ傾向を示した(林・鈴木, 1991)。1年を通してみると、教育園では秋期に出現種数が増え

(46種), 冬期から春期の渡り時期まで種数が45種前後で安定し、夏に減少する(29種)という傾向にあった。この季節的な変化は3年間の調査を通じて、ほぼ変わりがなかった。

留鳥は19種、夏鳥は2種確認された。留鳥と夏鳥について、教育園で繁殖が示唆された種を表に示した(第3表)。観察された行動から繁殖が示唆された鳥類は15種で、クロサギ, トビ, カルガモ, ハシボソガラス, ハシブトガラスについては、営巣から巣立ちまでが連続して観察され、繁殖は確実と考えられた。特にクロサギは、神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類に指定され、繁殖個体もわずかな希少種となっている。村石(2011)が報告した以降も、教育園内の笠島で2011年、2012年と毎年繁殖に成功し、貴重な記録といえる。笠島は天神島から離れていたため、小型種の繁殖状況が確認できなかった。そのほかの10種は、営巣や幼鳥のみの確認だけに留まった。

### 2. 環境の利用状況からみた鳥類相

環境別で最も多くの種が観察されたのは岩礁地帯であった。サギ類、シギ・チドリ類、カモメ類が多く見られたが、本来は河原や干潟などの水辺も幅広く利用し生息する種である。同じく河原や湖沼の水辺に生息するカワセミやセキレイ類、また樹林や草地、畑などを主な生息

場所とするツグミやジョウビタキ、モズといった鳥類も岩礁地帯で観察された。岩礁地帯で確認された種のほとんどが、岩の上や水際、水中を採食の場として利用していた。その結果として岩礁地帯に生息の場が集中していると考えられた。本来の生息場所の代わりに、岩礁地帯を利用する種が多種多様であることが、教育園の鳥類相の大きな特徴といえる。

一方で本来の環境のみで確認された種もあった。海上ではカンムリカツブリ、ウミアイサ、ウミスズメなどが観察された。ただし海上で確認された種のほとんどは通過鳥であった。陸域では、コゲラ、シジュウカラ、メジロが樹林で確認された。樹林のみを利用する特殊な例に、ゴイサギがあげられる。10~20羽の群れで、日中休息する姿が観察されたが、ほとんどの個体が日没とともに小田和湾奥部や秋谷方面に飛んでいき、教育園内で採餌する行動は見られなかった。同じサギ類のアオサギやコサギは日中に教育園の岩礁地帯で採餌し、夜間に別の場所に移動していたが、ゴイサギは逆に樹林を嗜としてのみ利用し、夜間はほかの場所で採餌を考えられた。樹林のみを利用する種で、留鳥または冬鳥として記録された鳥類は前述の3種とゴイサ

ギ、シメを合わせた5種であった。ひとつの環境だけを利用する種は出現率が低く(10%未満)、通過鳥が多いが、岩礁地帯を含め、教育園の多様な環境を組み合わせて利用している種の多くが、留鳥や冬鳥として定着していることがわかった。

### 3. 過去の鳥類相との相違点

1999年6月から2002年3月までの期間に調査が行われた橋口(2003)(以下、便宜的に前回調査と記す)の記録と比較して検討する。前回調査と今回の調査に、柴田(1974)で記録された鳥類を加えて表に示した(第4表)。出現タイプ別に整理すると(割合はタイプ別種数/総種数)、留鳥は今回19種(20.2%)・前回18種(22.5%)、夏鳥今回2種(2.1%)・前回3種(3.8%)、冬鳥今回17種(18.1%)・前回17種(21.3%)、旅鳥今回4種(4.3%)・前回3種(3.8%)、通過鳥今回52種(55.3%)・前回39種(48.8%)となり、前回調査から通過鳥の種数が増加しているものの、それぞれの割合に著しい変化は見られなかった。また共通して記録された鳥類は67種になった。前回調査では80種が記録されており、共通して観察された種の割合は80%以上を示した。その内訳は、留鳥17種、夏鳥2種、旅鳥3種、冬鳥17種、通過

第3表 教育園内で繁殖活動が観察された鳥類一覧。

種	観察された繁殖に関する記録
クロサギ	教育園内(笠島)での営巣。雛への給餌。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
カルガモ	教育園内(笠島)で巣と卵の殻を確認。巣立ち後すぐの幼鳥。
トビ	教育園内(天神島・笠島)での営巣。雛への給餌。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
イソシギ	成鳥による求愛。巣立ち後すぐの幼鳥。
キジバト	教育園内(天神島)での造巣と抱卵。
コゲラ	巣立ち後すぐの幼鳥。
ツバメ	巣材運び。佐島マリーナ建物内での営巣*1。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
ハクセキレイ	巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
イソヒヨドリ	巣立ち後すぐの幼鳥。
シジュウカラ	教育園内(天神島)での餌運び。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
メジロ	巣立ち後すぐの幼鳥。
カワラヒワ	巣立ち後すぐの幼鳥。
スズメ	巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
ムクドリ	教育園内(天神島から島外へ)での餌運び。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
ハシボソガラス	教育園内(天神島)での営巣。雛への給餌。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。
ハシブトガラス	教育園内(天神島)での営巣。雛への給餌。巣立ち後すぐの幼鳥。幼鳥への給餌。

第4表 天神島臨海自然教育園における鳥類の確認種リスト。

科	種	74 年度	99~01 年度	09~12 年度	区分	科	種	74 年度	99~01 年度	09~12 年度	区分
アビ	アビ	●			P	トウゾクカモメ	●		●	●	P
	オオハム	●			P	カモメ	●	●	●	●	R
	シロエリオオハム		●		P	カモメ			●	●	P
カイツブリ	ハジロカイツブリ	●			P	セグロカモメ	●	●	●	W	
	アカエリカイツブリ	●			P	オオセグロカモメ	●	●	●	●	W
	カンムリカイツブリ		●	●	P	ワシカモメ			●	●	P
	ミミカイツブリ		●	●	P	シロカモメ	●	●	●	●	P
ミズナギドリ	オオミズナギドリ	●	●	●	T	ユリカモメ	●	●	●	●	W
	ハシボソミズナギドリ	●	●	●	P	ミツユビカモメ	●				P
ウ	カワウ		●	●	R	アジサシ	●				P
	ウミウ	●	●	●	W	コアジサシ	●	●	●	●	P
	ヒメウ	●	●	●	P	クロアジサシ	●				P
グンカンドリ	コグンカンドリ	●	●	●	P	ウミスズメ	ウミスズメ	●	●	●	P
サギ	ゴイサギ	●	●	●	W		カンムリウミスズメ	●	●	●	P
	ササゴイ	●			P	ハト	キジハト	●	●	●	R
	アオサギ		●	●	R	アオバト	●	●	●	●	P
	ダイサギ		●	●	W	ドバト	●	●	●	●	P
	チュウサギ	●	●	●	P	オウム	セキセイインコ	●			P
	コサギ	●	●	●	R	アマツバメ	ヒメアマツバメ		●	●	P
	クロサギ		●	●	R		アマツバメ	●	●	●	P
カモ	マガモ	●	●	●	P	カワセミ	カワセミ	●	●	●	W
	コガモ		●	●	P	キツツキ	コゲラ	●	●	●	R
	カルガモ	●	●	S	アオゲラ	●	●	●	●	P	
	ホシハジロ		●	●	P	ヒバリ	ヒバリ	●	●	●	P
	キンクロハジロ	●			P	ツバメ	ツバメ	●	●	●	S
	スズガモ	●			P	コシアカツバメ	●	●	●	●	P
	クロガモ	●			P	イワツバメ	●	●	●	●	P
	ビロードキンクロ	●			P	セキレイ	キセキレイ	●	●	●	P
	シノリガモ	●			P	ハクセキレイ	●	●	●	●	R
	ウミアイサ		●	●	P	セグロセキレイ	●	●	●	●	P
タカ	ミサゴ		●	●	W	ビンズイ	ビンズイ	●	●	●	P
	ハチクマ		●	●	P	タヒバリ	タヒバリ	●	●	●	W
	トビ	●	●	●	R	サンショウウキ	サンショウウキ	●			P
	オオワシ				P	ヒヨドリ	ヒヨドリ	●	●	●	W
	ノスリ		●		P	モズ	モズ	●	●	●	W
	ハイタカ		●		P	ツグミ	ジョウビタキ	●	●	●	W
	オオタカ		●		P	イソヒヨドリ	イソヒヨドリ	●	●	●	R
ハヤブサ	サシバ	●	●	●	P	アカハラ	アカハラ	●	●	●	W
	ハヤブサ	●	●	●	P	シロハラ	シロハラ	●	●	●	W
キジ	チョウゲンボウ	●	●	●	P	ツグミ	ツグミ	●	●	●	W
	コジュケイ	●	●	●	P	チメドリ	ガビチョウ	●	●	●	P
チドリ	キジ	●	●		P	ウグイス	ウグイス	●	●	●	W
	コチドリ	●	●	●	P	オオヨシキリ	オオヨシキリ	●	●	●	P
	シロチドリ	●	●		P	センダイムシクイ	センダイムシクイ	●	●	●	P
	イカルチドリ				P	エゾムシクイ	エゾムシクイ	●	●	●	P
	メダイチドリ		●	●	P	メボソムシクイ	メボソムシクイ	●	●	●	P
	ムナグロ	●	●		P	セッカ	セッカ	●	●	●	P
	ダイゼン	●			P	ヒタキ	キビタキ	●	●	●	P
シギ	キョウジョシギ	●	●	●	T	シジュウカラ	コガラ	●	●	●	P
	トウネン	●	●	●	P	シジュウカラ	シジュウカラ	●	●	●	R
	ハマシギ	●			P	メジロ	メジロ	●	●	●	R
	コオバシギ		●		P	ホオジロ	ホオジロ	●	●	●	P
	タカブシギ		●		P	アオジ	アオジ	●	●	●	W
	ミユビシギ		●		P	クロジ	クロジ	●	●	●	P
	アカカシシギ		●		P	アトリ	カワラヒワ	●	●	●	R
	キアシシギ	●	●	●	T	シメ	シメ	●	●	●	W
	イソシギ	●	●	●	R	ハタオリドリ	スズメ	●	●	●	R
	オオソリバシシギ	●	●		P	ムクドリ	コムクドリ	●	●	●	P
	ダイシャクシギ	●			P	ムクドリ	ムクドリ	●	●	●	R
	ホウロクシギ	●	●		P	カラス	オナガ	●	●	●	P
	チュウシャクシギ	●	●	●	T	ハシボソガラス	ハシボソガラス	●	●	●	R
	セイタカシギ セイタカシギ	●	●	●	P	ハシブトガラス	ハシブトガラス	●	●	●	R

計126種 71種 80種 94種

※R:留鳥 S:夏鳥 W:冬鳥 T:旅鳥 P:通過鳥 (区分については2012年度の確認状況に準じた).

74年度:柴田(1974) 99~01年度:橋口(2003) 09~12:本報告に基づく確認種.

鳥28種であった。この結果から、鳥類相を構成する主な種には、ほとんど変化がないと考えられる。

前回調査で記録され、今回の調査では観察のなかった鳥類は12種であった。いずれも一時的な滞在、もしくは1~2例の観察例で、その当時でも稀な種がほとんどであった。また今回の調査だけで記録された鳥類は27種であったが、多くは短期間だけ利用する通過鳥であった。一方で、通過するだけの28種が10年経過しても共通して観察できるのは、教育園の鳥類相の特徴のひとつといえる。

前回調査では、柴田(1974)との比較で、当時新たに確認されたアオサギ、ダイサギ、カルガモ、コゲラ、カワセミ、シメが定着したこととに注目している。以上の6種については今回も記録され、種により差はあるが、前回調査の時より出現率の増加傾向が認められた。そして今回の調査で注目すべき種に、カワウとミサゴの2種があげられる。特にカワウは1960~70年に国内個体群の絶滅が危惧されていたが、その後回復が見られ、2003年には北海道から沖縄県まで生息が確認された種である(高木, 2005)。神奈川県では1994年頃から相模川に飛来するカワウの数が急速に増え、2002年には相当数が夏期にも留まるようになった(水産庁, 2003)。カワウが教育園で初めて記録されたのは2003年の10月で(天神島ビジャーセンター, 2003a), これは相模川で個体数が増加した時期とほぼ一致している。観察された当初は、ウミウの群れの中に少数が観察されているだけであったが、今回の調査では通常で観察され、留鳥として定着している。主に海上での採餌と笠島での休息を確認し、最大で700個体以上の群れを記録した。カワウは漁業被害や樹林の枯死による景観問題など、各地でその対策が検討されている種である(日本野鳥の会, 2001)。教育園で魚を捕食する行動はよく観察されているが、今のところ目立った問題は起きていない。ただしカワウの個体数の増加により、生息圏の重なるウミウの越冬、餌資源を巡る競合種への影響が懸念される。また河川では漁業被害にも関係していることから、教育園の海中の生態系、特に魚類相に影響を及ぼさないかについても注意が必要だと思われる。

ミサゴも、カワウと同時期の2003年12月に教育園で初めて記録された(天神島ビジャーセンター, 2003b)。ミサゴは環境省レッドリストで準絶滅危惧、神奈川県レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されている種である。今回の調査期間中では、年を追うごとに出現時期と出現率が増加する傾向にあり、複数個体が同時に観察できたこともあった。神奈川県内では、宮ヶ瀬

湖周辺で、夏の時期に観察されているが、まだ繁殖記録はない(高桑ほか, 2006)。今後教育園で注目すべき種といえる。

## まとめ

以上のように記録された鳥類について、季節的な出現状況と利用環境、前回調査との比較検討も行い考察してきた。教育園の狭い範囲にもかかわらず、多くの種を観察できたが、最も重要な点は、前回調査と今回の調査で主要な鳥類相に変化がなかったことである。このことは海域から陸域の樹林まで連続する多様な自然を保護してきた成果といえる。ただしこの残された自然を巡って、今まで見られなかった鳥類が進出してきているのも事実である。柴田(1974)では、コサギの増加が従来なかった異例な事態とされ、橋口(2003)では、アオサギの増加に注目している。そして今回の調査では、カワウの定着が認められたことが注目すべき変化となった。

## 引用文献

- 橋口陽子 2003. 天神島の鳥類相. 横須賀市博研報(自然), (50): 51-65.
- 林 公義・鈴木茂也編 1991. 三浦半島の野鳥—人とともに生きて—. 52ページ. 横須賀市自然・人文博物館.
- 村石健一 2011. 天神島および笠島保護水域内におけるクロサギの繁殖記録. 横須賀市博研報(自然), (58): 47-48.
- 日本野鳥の会 2001. 野鳥, (647): 10-14.
- 柴田敏隆 1974. 天神島・笠島およびその周辺海域の鳥類. 横須賀市博雑報, (20): 52-64.
- 水産庁 2003. 内水面生態系管理手法開発事業報告書(カワウ等食害防止対策). 250ページ.
- 高木憲太郎 2005. バードリサーチニュース. 2 (1): 4. 非営利活動法人バードリサーチ.
- 高桑正敏・勝山輝男・木場英久・加藤ゆき・浜口哲一・平田寛重・石井隆・秋山幸也 2006. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書. 442ページ. 神奈川県立生命の星・地球博物館.
- 天神島ビジャーセンター 2003a. 天神島だよりNo.30. 2ページ. 横須賀市自然・人文博物館.
- 天神島ビジャーセンター 2003b. 天神島だよりNo.31. 2ページ. 横須賀市自然・人文博物館.